肝硬変

1　肝硬変とは

肝硬変とは、慢性肝炎が長期間持続することで徐々に肝臓が硬くなり、本来の肝臓の機能が果たせなくなる状態です。肝炎の原因がＢ型・Ｃ型のウイルス性肝炎、アルコール性肝炎、非アルコール性肝炎、その他の特殊な肝炎、いずれであっても肝炎が持続すれば最終的には肝硬変になります。

通常 10～20 年と長い時間をかけて肝硬変に進行しますが、AST（GOT）/ALT（GPT）の値が高く、激しい肝炎が持続する人では、5 年程度の短期間で肝硬変になる人もいます。肝硬変になってから、さらに進行すると特徴的な症状が出てきます。

○代償性肝硬変

肝臓の働きが良く、自覚症状もほとんどない状態の肝硬変。正常な肝細胞が肝臓の機能を保とうと働き、特に自覚できる症状が出ない。

○非代償性肝硬変

代償性肝硬変が進行し、正常な肝細胞が残り少なくなり、体に必要な機能を保てない状態の肝硬変。全身倦怠感、黄疸、食道静脈瘤、腹水、むくみ、肝性脳症などの症状が出てくる。

２　肝硬変の合併症

肝硬変が進行すると、しばしば次のような合併症が出てきます。

（１）肝性腹水（胸水）

腹水は、肝臓で作られるアルブミンが十分産生できないために、血液中の水分が腹や胸にたまった状態です。

【治療】減塩食、水分制限、利尿剤、アルブミン投与

（２）肝性脳症

肝臓で分解されるアンモニアやその他の有害物質が、肝機能低下に伴い徐々に全身に回ってしまうことより、脳内に入って、昼夜逆転、不穏状態（気分が落ち着かず、異常行動をとる）、だんだんと眠くなり（傾眠状態）、最終的には昏睡状態になります。

【治療】タンパク制限食、便秘の予防、合成２糖類内服（ラクツロース®など）、分岐鎖アミノ酸製剤内服、点滴（リーバクト®、アミノレバン®など）、難吸収抗菌剤（リフキシマ®）

（３）食道静脈瘤

肝硬変が進行すると、肝臓に十分血液が流れにくくなり、肝臓に入れなかった血液がしばしば胃上部から食道粘膜表面に流れ込み、食道静脈が拡張し始めます。これが食道静脈瘤です。しばしば静脈瘤が破裂し、吐血や下血の原因となります。胃静脈瘤ができることもあります。

【治療】内視鏡を用いた内視鏡的食道静脈瘤硬化術、結紮術や外科的に脾臓を切除して、血管を結紮する方法など